

生ずるもあらん此地もいにしへは入江あるひは流水のところにて其性をつたへて今に片葉に生ずるか風土の一奇事と云べしつのに鶉殿のあしと同品なり

〔攝陽群談十六名物土産〕難波蘆簾 同郡成西ニ屬ス今モ以蘆篇アリリ

夫十四木 すすもたく難波乙女があしすだれよにすけたる我身なりけり 爲家

笙。篳。篥。簧。 島上郡鶉殿村ノ蘆ヲ宜トス因テ樂人設之簧ニ作リ音ヲ好スルト云ヘリ

〔古事記上〕國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣疏之時疏字以上如葦牙因萌騰之物而成神名宇麻

志阿斯訶備比古遲神

〔古事記傳三〕葦牙は阿斯訶備と訓べし書紀にも然訓り但し備を清て伊の如く讀はわろし又詞を濁るもわるし成坐る神御名の訶備にて清濁炳焉

し葦のかつゝ生初たるを云名なり牙字は芽と通へり

〔萬葉集二〕同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首

吾聞之耳爾好似葦若未乃足痛吾勢勤多扶倍思

右依中郎足疾贈此歌問訊也

〔冠辭考阿一〕あしがひの あしなへわがせ 又あしなへの

万葉卷二に略 歌 この葦若未をあし加比と訓は神代紀に天地之中生一物狀如葦牙アシガヒてふに依

ぬさて葦牙は葦の若めにてそは即葦が苗なれば葦牙の葦苗てふ意にて人の蹇に轉じいひ

かけたる歟又は葦若未は阿志奈倍と訓て葦のわかき葉するの靡まなへるを蹇にいひかけ

しにもや侍らん

〔萬葉集七〕雜歌 旋頭歌

水門葦末葉誰手折吾背子振手見我手折

右二十三首二十首略 柿本朝臣人麿之歌集出